にしただど。

そうしたら、その若者は、他の奉公人とは違って、一生懸命骨身おしまずに、来る日も来る日も寝る間も惜しんで働いたんだど。

喜んだのは、長者様だ。

「こんなに、働く若者は、見たことねえ。これで、給金も払わなくっていいだから。得した。」

と大喜びをしていただど。

そろそろ、秋の穫り入れが近くなってきたら、その若者は、毎晩荷縄とモッコを編むようになっただど。

長い長い荷縄と、大きなモッコができあがった頃、若者は、

「いやいや、大変お世話になりやした。約束通り今日は、背中に背負える分だけの稲荷を頂いていぎやす。」